

# フクジュソウ

牧 幸 男

お正月の行事の起原ははっきりしていないが、日本の行事の中で最も古くから行われてきたらしい。ただし、現在のようなお正月の行事（門松やしめ飾り、鏡餅などを飾ることが浸透したのは、江戸時代に入り庶民にも手軽に物品が手に入るようになってからと言われている。現代でのこの行事に、丁寧に「お」をつけて「お正月」と表現するのも、日本人には新しい年を迎えようとする気持の表れであろう。

新しい年を迎えるにあたって、様々な飾り物をして新年を寿ぐが、その中で縁起の良い名前の植物にフクジュソウがある。お正月にジュークジュソウを飾る習慣は、江戸初期からで松江重頼（1602～1680）著『毛吹草』（1645）に、福寿草又は元旦草の記述があるので推測される。恐らく、名前の素晴らしさだけでなく、花の少ない時期に咲くことから珍重されてきたのだろう。新年の季語となっている福寿草は早春に黄金色の花を咲かせることから、一番に春を告げるという意味で「福告草」という名前が江戸時代に使われた。その後、ゴロが悪いことから、おめでたい「寿」と差し替えられ「福寿草」となった。この「寿」は、開花期が長いことから長寿の意味もあり定着したと言われている。また、旧暦の正月（2月）頃に咲き出すことから、吉祥植物として尊重されているだけに別名が多い。朔日草、元旦草、正月草、正月花、賀正蘭、報春花、福神草、歳旦草、長寿菊、雪蓮、献歳菊、福徳草、満作草、福づくり草等多数ある。これほどめでたい文字ばかりで呼ばれている植物も珍しい。



咲き始めの福寿草

福寿草は、国内の中部以南では高冷地で稀にしか見られないが、北地に多く生育するキンポウゲ科の多年生草本である。根茎は短くてやや肥大し、多数の暗褐色のひげ根をだす。茎は直立し緑色の葉と共に毛がなく、下部には数個の広いさやがあって茎を抱き、茎の高さは最後には15～30 cmにもなる。葉は互生で長い柄がある。花の咲き始めは2～3月頃で、新葉と共に茎頂に黄色の美しい花径は3 cmほど黄金色で光沢のある花を一個つける。当初は茎が伸びず、包に包まれた短い茎の上に花だけがつくが、次第に茎や葉が伸び、いくつかの花を咲かせるようになる。

花は、光や温度に非常に敏感で、昼間でも日がさえぎられると1～2分で花がしぼみ、再び日が当たるといつの間にか花が開く向日性が強い。一方で、日暮れや夜間、曇天は閉じてしまうが、暗黒下でも15～20℃の温度で完全に開く傾熱性も有している。また、季節外れの寒い時期に開花する花は、中央部に集熱することにより保温力を高め、昆虫を集め受粉を効果的にしている。蜜を持たない福寿草は寒い時期に咲くので、花弁を開閉することで花の中の温度を下げないようにしているのだろう。この性質は、種の保存にとって周到な戦略であり、活動能力が低下した昆虫にとっては、足湯と交配相手との出会いの場のような存在かもしれない。

花後、ニンジン様の多葉が伸びて繁りが、初夏の暑さが訪れる頃には、地上部は跡形もなく枯れる典型的なスプリング・エフェメラル<sup>\*1</sup>である。なお、果実は、金平糖状で、たくさんつけ熟すると花の付近に苗が育つが、実生に種子は開花するまで6年もかかる。

注\*1：Spring ephemeral は、早春花を咲かせ成長するが、夏には枯れてあとは地下で過ごす一連の草花の総称。春植物ともいう。

福寿草の種類は多く、『新訂牧野新日本植物図鑑』にはエダウチフクジュソウ *Adonis ramosa*、ミチノクフクジュソウ *Adonis multiflora*、キタミフクジュソウ *Adonis amurensis*、シコクフクジュソウ *Adonis shikokuensis* の4種の自生が収録されている。元々福寿草は変異性

に富み、紅色の野生品もある。現在、花卉が黄・緑・黄と三層に咲く三段咲、紅色系の緋の海、秩父紅、江撫子、白花の弁天等多数生まれている。福寿草を園芸種として栽培されだしたのは、元禄時代の伊藤伊平衛(生没不明)編纂の『花壇地錦少』(1695)に祝儀花と記載されたのが最初らしい。又、水野元勝<sup>もとかつ</sup>他著の『花壇綱目』(1681)によれば、品種改良が本格的になり、紅花、白花、八重咲、段咲、糸咲、紋咲等が生まれ、126種も収載されている。正月に盆栽に植えこむ風習は、享保年間(1716~1936)頃に最盛期を迎えたようである。

この植物、自然界に群落地を作ることが多いが、花の少ない冬期間花が咲くので、園芸用に庭に植える人もいる。長野県内には何箇所かの群落地があるが、私が住む松本市付近では四賀赤怒田の群落が良く知られ、毎年福寿草祭りが行われている。

福寿草は花のすばらしさ、名前の良さから江戸時代以降、多くの人に詩歌の対象に詠まれるようになった。

人みなのはいふ名おひて あらたまの 年のはじめに 咲くやこの花 本居宣長

花よりも 名に近づくや 福寿草 加賀千代女

植物名は「福寿草は、新年を祝う花として元日に用いるので、祝福してこの佳い名を付けたのである。漢名は側金盞花<sup>そくきんせんか</sup>、沐涼花<sup>もくりようか</sup>である。」と牧野富太郎博士は述べている。当初、新年の季語となっているフクジュソウは、黄金色の花を咲かせることから一番に春を告げると言う意味で福告草と言う植物名が使われた。

一説であるが、小林一茶が庭に福寿草を植えた。当然普通の黄金色の花が咲くと思っていたところ、白花が咲いた。彼は貧乏しているから白花とは人を馬鹿にするにも程があると怒ってこの植物を「貧乏草」と名付けたエピソードが残っている。

学名は *Adonis amurensis* で、属名はギリシア神話に登場する少年の名。欧州産の本属のものは赤花をつけるのでこれをアドニスの血に例えた。アドニスは美と愛の女神ビーナスに愛された美少年で、フェニキアの王キニユラスとその王女であるミュラーの息子である。彼は狩りを楽しんでいる時者に殺されてしまった。ビーナスは現場を見て「私の悲しみは永遠なり……」と天に祈ると、彼の鮮血から赤い花が咲いた。この花を人々はアドニスと名付けたと言われている。種小名はアムール川流域の意で、寒い地域の産することを示している。

薬用では、根茎を乾燥したものを生薬名「福寿草根」と呼び、浸剤、チンキ剤として、強心、利尿効果があり、民間薬として使われることがあったが、最近では使われていない。有毒成分は主成分がアドニンであるが、シマリンやアドニトキシンも検出されている。

食用は全草に有毒物質が含まれるので厳禁である。芽出の頃は、フキノトウと間違えたり、若葉がヨモギの葉に似ていたりするので、誤食しやすい為、注意すること。症状は嘔吐、呼吸困難、心臓麻痺等で重症の場合死亡する。以前、テレビ信州で2007年3月30日放送の「情報ワイドゆうがたGet!」の特集コーナー「春うらら!花の里のんびり散歩!」で、天ぶらを紹介し、女性リポーターが毒草と知らず食べてしまったが、事故に至らなかった。

花言葉は「永久の幸福」「思い出」「幸福を招」「祝福」等である。

福寿草は日本人には親しまれていることから、郵政省発行の切手の意匠に何度か採用されている。1982年(額面10円)、2003年(額面10円)、2012年(額面50円と80円)、2024年(額面52円)等である。

なお、環境省レッドリスト-2000年版までは絶滅危惧II(VU)であったが、2007年8月の見直しによって、ランク外となった。



福寿草

